

【実践報告 1】

自分達でできる！みんなでやろうよ！

～さらに興味を広げていく深い学びへ～

別府大学附属幼稚園主任・5歳児担任 中村尚子

1 はじめに

2020年度の幼児教育もコロナ禍により、感染対策が重視された。どの教育機関も同じ悩みを抱え、規制の中、幼児の発達をどのような保育内容で促していくかが課題となっている。新生活様式を取り入れながら、幼児にとって必要な体験を探った1年である。

そのような環境の中であっても「質の高い保育」を求め、幼児の学びの芽を育てるための援助のあり方を考えてきた。

4月・5月は登園自粛のため、実質6月からのスタートとなり、教育課程の組み直しから始めた。各期の育ちと本来もっている個の育ちのずれを見逃さないことが課題となり、育ちの見通しがもてない中で“どのような遊びを提案することが深い学びへと繋がっていくか”と各年齢で予想を立てた。予想と実態と比べ、修正を繰り返しながら保育を進めている。

2 遊びを学びへ

つながりを大切にしてきたこれまでの保育に対して、今年度は密活動を避けるという厳しい条件がのしかかり、園外保育の中止、密になる集会の回避などつながることが難しい状態であった。

しかし、5歳児はこれまでの積み重ねにより、遊びに対する気持ちが貪欲のままであり、密にならない大学の雑木林へでかけ、鬼遊びやごっこ遊びを存分に楽しんでいる。その中での「バーベキューごっこ」が興味を広げながら深い学びにつながる遊びになるのではないかと考え、展開予想をたてて、魅力的な環境の構成や活動の展開に力を注いだ。

3 5歳児 実践報告

かまどでホットドッグを焼こう！

～自分達でイメージを実現するために～



《かまどができるまで》

森でバーベキューごっこをしていた時に「かまどが作りたいけど、レンガが足りない。」というO児達にレンガ置き場を知らせた。子ども達はリヤカーにレンガを乗せる係と運ぶ係に自分達で分かれて森に全て運び込んだ。かまどを知っているというO児が自分のイメージで作りましたので、友達と力を合わせて作ることを願ってO児のイメージを伝える場を作った。「かまどをテレビで見た。」というO児の話聞きながら子ども達はかまどのイメージを広げ、みんなで試行錯誤しながら、完成させた。「パンが焼けそう。」と言ったO児の言葉で子ども達は“イメージ通りにできた”と満足し、さらに“かまどを使ってパンを焼きたい”という共通の願いをもった。かまどが出来た喜びや“パンを作る”という思いを自分の担任や他の友達にも伝えたいという強い思いが生まれたので紹介する場を作った。

教師の展開予想：自分達で作ったかまどを実際に使えるという期待から
興味をもち、進んで取り組むだろう



援 助：イメージが湧きやすいようにこれまでの事例を伝える

魅力的な環境：自分達で創ったかまどで火を付けて焼く

《かまどを使って作ることができる》

「このかまどで何か焼いてみたらいいのに。」と伝えると「えー!?!」「どうやって?」「してもいいの?」と目を輝かせた。「前の年長さんの時は、ここで焼きそばとかもしたよ。」と話すと「やる!」「みんなでやろうぜ!」とO児の言葉でさらに話が進んでいく。「ホットドッグは?」「それならできる。」など次々とイメージを膨らませた。

「でも、ルールはあるからね。一つはこの森で火を使うには消防署、大学、園長先生の許可をとること。もう一つは自分達で考えたり準備したりすること。どう?」と実現のための方法を伝えた。すぐに「わかった。園長先生の所にいこうぜ。」と走り出し、自分達で園長先生に思いを伝え、許可をもらった。

翌朝、T児が「いる物を考えた。」と紙にホットドッグ作りに必要な材料を描いた用紙を持って来た。また、A児も「クッキーの作り方を考えた。」と得意気である。「いつ、買いに行くの?」「どの店に行く?」などをN児、M児達が話している。この日は朝からホットドッグ作りをするといった思いをもち期待をしながら登園してきた子どもが多くいた。



～必要な材料を書いてきたT児～

教師の展開予想：期待が伝播し、だんだんと共通の目当てになるだろう



援 助：同じ場で話し合う時間を保障する

魅力的な環境：お店での買い物 材料は自分達で選び、代金を払う

《みんなで買い物を行く気持ちを高めて》

T児が書いてきた必要な材料を描いた用紙を紹介すると「給食のおばちゃんじゃなくて自分達で買い物に行きたい。」という意見が出て「そうしたい。」などすぐに一致団結した。

どこに行くかが話題になったが、買い物に出るには許可が必要であることを伝え、この日は日にち決めや買い物内容を話し合った。

グループ毎に一つの物を決めて買うように提案すると「よっしゃー。一緒に買いに行こうぜ!」というO児の声に盛り上がり、次々に材料の名前があがっていった。

買い物を受け入れてくださるスーパーが決まったことを伝えると、さらに気持ちが高まり「早く行こうよ!」と座ってられないほど興奮状態になった。

「そのスーパーは歩いていけないから、バスのおじちゃんに頼まないと・・・」と言っていた最中にO児、H児達が「行こうぜ!」「行ってくる。」と保育室から飛び出し、降園用のバスの側へ行き、「おじちゃん!お願いします!」「〇〇に連れて行っ



～みんなで買うものを話し合う～

てください。」と相手にわかるように思いを伝えた。運転士さんと事前に話し合っていたので、「良かった。連れて行くよ。」と子どもの思いに応じてくれた。戻ってきた子ども達は息を切らせながら「いいって言ったよ。な！」とみんなに報告した。するとみんなも「よっしゃー行けるぞー！」と言い、その声に「やったー！」と喜びが共有されていった。

教師の展開予想：買い物に出かけるといった特別感や喜びを共有し仲間意識が強まるだろう。イメージが実現していく過程によって“やればできる”と実感することができ、より主体的に取り組むだろう。



援助：自分も参加しているという実感がわくように、全員が役割をもち友達と一緒に取り組む楽しさを十分に味わえるようにする。
買い物をするために必要な物や材料を予想して準備する。

魅力的な環境：本物のお金500円 友達と行く大型スーパー

《役割をもって取り組むために》

買い物当日の朝、500円で必要な食料を買うための、話し合いを行った。

重なることがないようにくじ引きで買う物を決めていった。(※1)

「何になった?」「こむぎこ!」「よし。」と他人事ではなく、「自分が買う」という気持ちをしっかりともっていた。

さらに「お金はなくなさないためにどうしたらいいかな。」と聞くと財布作りが始まり買い物袋作りも行った。「かごを持つのは私。」「お金を払うのは?」など買い物のイメージを言葉にして役割を決めていく。「袋がなくならないように名前を書こう。」「お財布は首にかけられるように紐をつける。」など友達と話し合い、工夫をして準備をする。その様子は期待に満ちて意欲的だと感じた。

いよいよ、買い物に出発となった。



(※1) の援助について

・5歳児の話し合いでは意見の食い違いが多く起きる。活動にみんなが協同して取り組むようになるためには、それぞれの意見や悩みを大切に、困りを一緒に考える十分な時間の保障が必要である。

今回は、スケジュールを優先し、簡単に答えが出るくじ引きを行ったため、深い学びへはつながらなかった。話し合いの時間を保障できなかったことを強く反省した。

《役割に責任をもって》

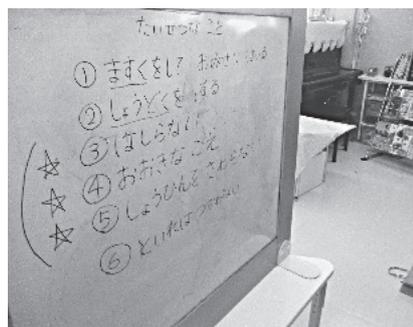
お店の中のルールも事前に自分達で出し合い決めて出発をした。(右写真)

到着すると自分の役割を確認し、責任を果たすために進んで取り組んだ。「俺がお金もってるよ。」「かごは私かもつ係!」と小声で確認し合い、品物を探して代金を払った。お店の方のご協力もあり払った代金とお釣りを合わせて財布に入れる体験もできた。

バスにもどってくると安心し、「買えましたー!」と得意気であり、おつりが多いことを競うような盛り上がりもあった。

財布を忘れたグループもあったが、“しまった”という気持ちを持ち、グループ全員で探しに行く姿が見られた。

また、自分達で決めた迷惑をかけない行動や感染対策をしっかりと守ることができた。



教師の展開予想: “いよいよ”という気持ちを高めて、次はどのように思考を働かせて、目当てに向かって考えを出し合うだろう。



援助: 安全に火や食品を扱うために雑木林の整備や感染対策をおこなう経験から自分で動こうとする姿を予想し、見定めながら良いタイミングで材料提供ができるようにする。

魅力的な環境: 自分達で購入した材料 かまど 本物の火
トングなど必要な道具

《作ったらかまどで焼こう》

グループの友達と自分の好きな具をパンに挟んでお家から持って来たアルミホイルに包み牛乳パックに入れた。燃えてしまうとどれが自分のホットドッグがわからなくなる経験を7月にしているため、燃えにくいパックの底に名前を書くなど工夫している子どもがいた。

準備ができると「森にいくぞ。」と誘い合い、かまどの前の落ち葉を掃いたりバケツに水を汲んできて燃え移らないように水撒きをしたりした。「私は何をしたらいいかな。」「枝もいる?」など自分ができることはないかと考えて行動した。



「これ位で大丈夫かな?」「みんな早く焼こうよ。」と期待がどんどんと高まって、かまどで焼く子どもと網の上に乗せて焼く子どもに分かれた。ひとつの牛乳パックに教師が火付けをした後

に火をもらう方法を取り、自分で火付けに挑む。「火は便利なものだが使い方によって危険」ということは7月の体験で学んでおり、火の回りを走ったりふざけたりすることはしない。

火がつくと自分のホットドッグを見失わないように見張っている。「火が強い。」と心配したT児。「なぜでしょうか？」とクイズ的に周りの子にも聞くと「風が強いから?」「牛乳パックが乾いているから。」と考えを出し合っていた。夏と今(冬)の違いは空気の乾燥により火がつきやすいことを伝えると「だから、火事になるんでな。」とH児が話し、周りの子どもたちもうなずいていた。

かまどの火が下から上へと燃え移っていく様子を見ながら「すごいよ。」「煙がでてきたな。」「何か匂いがしてきた。」「よく焼けるな。」など自分達でつくったかまどで焼くことができると実感したようだ。牛乳パックが焼けてしまうと完成であることも知っているので tong で自分のホットドッグを取って確認していく。「キャンプよりきれいにできた。」「中は熱くない。」「焦げなかった!」と嬉しそうに友達に見せ、森の中でホットドッグを味わった。

友達と一緒に食べながら「見て!煙が上に向かってきれい!」「本当や!」「凄いね。」などと木々の間を登っていく煙の様子に目を引かれていた。

また、「美味しすぎる。」「もう一個作れる。」「次は何ができる?」「焼き芋できる?」と次への期待を膨らませていた。

そこで、「これからもちゃんとルールを考えて、みんなで力を合わせたら、何でもできそうな気がするよ。」と話した。



(考察)

- O児たちは、かまどを作りながら考えていた以上に“うまく出来た”という思いが生まれたのだろう。“自分達の担任に見せて驚かせたい!”という思いを強くもち、自信満々に披露した。その姿から保育者は“子ども達が自分達で生み出した遊びを自分達で発展させることができるのではないか”と考えた。子ども達の目の輝きや声色などから、先に期待していることなどを読み取ったことによって子ども達自身による体験活動へとつなげることができたのだろう。
- 心を揺り動かすためには、まず魅力的な環境に出会わせていくことが大切であると考え。今回の場合は、自分達で力を合わせ工夫したかまどをつくり、それを実際に使えるという期待から始まり、本物のお金をもって友達とスーパーで買い物をするというワクワク感、火を使うスリル感、火を使

うためのルールや方法を知ったという学びの喜びなどそれぞれに心を動かして取り組めた。その結果、自分達でできることを前提に友達と次に挑戦することを出し合う姿につながった。

- 火を使っていく体験によって夏と秋の火の大きさの違いはなぜかと考えたり煙の方向や下から上に火が移っていく様子に気付いたりするなど、火の変化や仕組みに興味をもった。火の怖さにも触れ、これからの生活に活かすことができるだろう。

4 まとめ

火を使う計画は「焼き芋」「DAYキャンプの七輪昼食」「森の七輪おやつ」「手作り土皿焼き」など次々と繋がっている。今では風起こしで火の調整ができる子どもが誕生した。

現在のコロナ禍のような状況であっても、子ども達に豊かな環境、豊かな体験をさせたいと強く思い、日々を過ごしている。7月頃に“何もできない”という思いに入り込みそうになった時に子ども達が附属幼稚園の環境を活かし、イメージを湧かせ友達と考えを出し合って遊び込んでいくその姿に“できないのではなく、できることを考え、やってみよう”という考えに切り替える勇気ももらった。

大人によって考えられた体験は単発的になると思う。幼児期の学びを深めるためにも、体験させればよいという保育にならないように、幼児が体験していることを読み取り、その体験をつなげていくことが大切だと考える。

「これは面白そう」というもの、「やってみたい」と心が動く遊びや活動、「どうするといいか」と試行錯誤など遊び込める環境の構成を意識し、学びを深める保育をこれからも目指して研修を続けたいと思っている。



～七輪で焼いてみよう～



～焼き芋のおき作り～



～お皿ができるかな？～